

平安貴族社会にみる病氣治療の諸相

坂本 陽子

順天堂大学大学院医学研究科博士課程

古代，特に平安時代中期の貴族社会における病氣治療はどのように行われていたのであろうか。平安時代の医療については，医学史の通史的な研究として富士川游，服部敏良らによる研究がなされているが，これらは医学的見地からのものであり，祓や祈禱といった当時の手法については特別問題視されることはなかった。その後，古記録そのものの研究も進むなか，仏教や陰陽道などの宗教史の視点や治療儀法そのものに着目した研究もみられるようになったが限定的なものも多く，より包括的な研究が望まれる。

平安時代に生きた貴族たちが，自分たちの身体の不調や病の多くを物の怪やなにかしらの祟りによるものと考えていたことはしばしば知られることである。そして，そのような事態に遭遇した場合には，彼らは祓や祈禱といった呪術的要素の色濃い方法を対処のひとつとして選択することもあったといわれる。こうした対応から考えても，平安時代の貴族たちが考える心身の不調や病は，現代の我々とはかなり異なったものであったことがわかる。

今日のように医学が発達する以前の時代においては，病の原因が科学的に不確かなことにより，それらの理由を人知の及ばぬ存在に求めたりすることは無理からぬことであった。また，平安時代の生活様式を振り返ってみても，現代ではまじない・迷信の類いと同一視されるような禁忌を重んずる時代であって，日常生活と宗教的観念が容易に結びつくことは想像に容易い。つまり，その時代を正確に捉えるという点においては，当時の思想・価値観にどれだけ寄り添えるかということが非常に重要であると考えられる。以上の観点から，当時の思想，価値観をできるかぎり踏まえながら，いまいちど史料に立ち返り，平安時代の貴族たちが自分たちの抱える不調や病をどのように考え，どういった方法でそれに臨んでいたのかということを具体的に探ってみたい。

『小右記』は，平安時代中期の公卿である藤原実資(957-1046)によって書かれた日記である。実資は賢人右府とも称され，藤原道長・頼通らが権勢をふるった藤原摂関時代の全盛期に生きた人物である。現存する史料は982(天元5)年から1032(長元5)年までのもので，いつから書き始め筆を置いたかは定かではない。その間欠落した箇所もあるが，その内容は各方面にわたって詳細な見識に富む。実資は右大臣の位にまで昇りつめ，ときには道長をさえ批判したことが知られ，当時の政治情勢のただなかにあったのはもちろん，有職故実の流派である藤原北家小野宮流の出であり，平安貴族社会の慣習，儀式等に精通していた。このように平安貴族社会を代表する人物のひとりである実資が記した『小右記』は，当時の生活様式を背景とした記述の正確性や豊富さからみても平安時代を知る第1級の史料であるといえてよい。

この『小右記』を中心とした平安時代中期の古記録を用いて，平安貴族たちの考える心身の不調や病に関する記述を抽出し，彼らの考える病や不調とは何だったのか，それらの原因をどのように考え対処していたのか，その対処法だけではなく，これらに関わる人物・事柄についてもつぶさに検討を加え，平安貴族社会における病氣治療の全貌を捉える一助としたい。